

# 国崎二船祭プログラム

実施主体：鳥羽市国崎町町内会

2016年12月03日 中日新聞 朝刊伊勢志摩版 20頁

## ふるさと再発見

### 二船祭にイワシ到来

ある。平成二十五年に国崎町からお祭りの担い手の伝統を受け、セミの学生たちも参加した。以来、三年ぶりに二船祭が開かれるという。そこで、現在、皇學館大学が取り組んでいる教育プログラム(COC)の一種として位置づけ、セミから男女合わせて六人を募り、それが地域への課題に対する学生の取り組みを設定して参加することになった。

大田博博宮司を通じて世古与司一町内会長から話では、古くは、学生は漁師の補欠という形で、漁師の身内にあった。漁師の身内に

### 暗示の通り 海間谷勝つ

当日、午前中は船の調子を整えてもらい、メンバーとの交際を

ウマレとイワシとを呼ばれ、お祭りと加われない、快まりとなっているので、その際のランチピクニックである。その後、欠員が生じたので、学生入が補欠となり、大田、海間谷が勝つ、ウシが大勝になるとい



●2隻の船で競漕する二船祭 ●波打ち際に打ち上げられたイワシ―鳥羽市国崎町で

は九十歳を越えるというお年寄りに話を聞かせてもらった。大きなまが、うさした美談が今後の生きる力となることは間違いないだろう。

午後二時前、いよいよ前浜で船につかって身を清め、競漕が始まった。前浜の沖合から旗へ向かって並走する。その時であった。旗に近づいたらとどろきものが聞こえ、誰かが「イワシ」と叫んだ。

イワシが打ち上げられて跳ねているのを見た見物する町の人たちからも、「うさした」といって、それが聞こえたという声がかかった。

競漕は「エソ(種)ひけし」の応援の中、イワシの到来が暗示したかのようだが、海間谷が勝利を収めたのであった。(皇學館大学 皇学館大教授 伊勢市)





鳥羽市国崎町の伝統行事に二船祭がある。地元の風宮社の祭礼で、二隻の船で競漕する。かつて、このお祭りで船に乗ることができるのは国崎町内の長男だけとされていた。しかし、若者の減少が進む中で、行事の担い手不足が懸念される状況にある。

平成25年に国崎町からお祭りの担い手の応援依頼を受けて、ゼミの学生たちとともに参加した。以来、3年ぶりに二船祭が開かれるという。そこで、CLL活動として位置づけ、ゼミから男女合わせて6人を募り、それぞれが地域の課題に対する学習の狙いを設定して参加することになった。

世古与司一町内会長からの話では当初、学生は漕ぎ手の補欠ということであった。漕ぎ手の身内に「ウマレ」とか「イマレ」と呼ばれる不幸があると参加できない決まりとなっているので、その際のピンチヒッターである。その後、欠員が生じたので、学生2人が漕ぎ手となった。

二船祭は町内を里谷、海間谷の集落に分けて競う。里谷が勝つとボラが大漁、海間谷が勝つとイワシが大漁になるという。

当日、午前中は船の漕ぎ方の練習をさせてもらい、メンバーとの交流を図る。やや緊張気味であった学生たちも町の人たちの温かな心遣いになじむことができたようだ。一方で、女子学生たちは九十歳を超えるというお年寄りに話を聞かせてもらう。

午後三時前、いよいよ前浜で海につかって身を清め、競漕が始まった。前浜の沖合から浜へ向かって並走する。その時であった。浜辺にきらきらと光るものが見え、誰かが「イワシや」と叫んだ。イワシが打ち上げられて跳ねているのだった。見物する町の人たちからも、こうしたことはこれまで無かったという声が聞かれた。

競漕は「エゾ(櫂)ひけー」の声援の中、イワシの到来が暗示したかのように、海間谷が勝利を収めたのであった。(『中日新聞』伊勢志摩版「ふるさと再発見」平成28.12.3「二船祭にイワシ到来」による。

一部改変)

(指導教員: 齋藤 平)